

屋根裏のお札ふだに見る信仰 —佐倉市坂戸 林重孝家の事例による—

小林裕美¹⁾・木原律子²⁾

1) 千葉県立中央博物館
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
Email: h.kbysh20@pref.chiba.lg.jp
2) 日本民俗学会・房総石造文化財研究会

要旨 佐倉市坂戸の林重孝家の屋根裏から降ろされた約600点のお札について、内容を紹介する。そこから見えたのは、普通の人々の暮らしと信仰であった。お札は家、あるいは地域の信仰を知るうえで有意な有形資料である。

キーワード：お札、守札、屋根裏、庶民信仰

1. はじめに

本稿では、佐倉市坂戸の林重孝家の屋根裏に保管されていたお札を、整理することによって現れた、信仰の様相を紹介したい。

かつて伝統的な農家の家屋の屋根裏には大量のお札が納められ、家の守りとされてきた。そのお札類を歴史民俗学的な視点から取り上げ、分析の俎上に乗せるようになったのは1980年代からである。特に『民具マンスリー』（神奈川大学常民文化研究所）には多くの蓄積があり、管見の限り、戸川安章「守札と出羽三山」（1987）、西海賢二「守札にみる庶民信仰」（1987）、時枝務「守札と信仰—農家における守札の存在形態—」（1988）、菅根幸裕「守札の分析にみる村落の信仰—兵庫県福崎町の事例を中心に—」（1991）、川上勉彦「守札からみた伯耆の庶民信仰」（1994）、木原律子「房総にみる守札の一例—千葉県鴨川市の守札にみる信仰—」（2007）がある。またその他、千葉県北部における調査例として、早いものでは鎌ヶ谷市郷土資料館「お札に対する現世利益の願い—初富菊名家旧蔵のお札について—」（1993）、小川浩「千葉県北西部の守札にみる信仰形態—近世から明治期までの分析—」（1995・1996）、小林稔「屋根裏からの報告—山田家旧母屋取り壊しに伴う守札調査概報—」（1996）があり、その後も八千代市、富里市、白井市で成果の発表が続いている（木原 2004、富里市教育委員会 2011、白井市教育委員会 2015）。鎌ヶ谷市郷土資料館では企画展も開催された（『平成29年度企画展 鎌ヶ谷・おふだづくし—信仰の玉手箱—』）。千葉県北部は格別お札への関心が高く、調査の蓄積が多い地域のように見受けられる。

さて、時枝は一軒の家に保管されていたお札を、その家にもたらされた経緯から4類型に分類することを提示

した。①氏子や檀家として、②家族による参詣、③遠方社寺参詣の土産（代参講を含む）、④御師など神職による定期的な配布の4類型である（時枝 1988）。時枝による分類は以降の研究の範となり、各地の事例は、配布元の神社別にお札数を数え、時枝分類に修正を試みつつ報告されることとなった。例えば小川は、①基本信仰圏、②寺社参詣圏、③御師（守札）配布圏の3類型に分類している（小川 1995）。しかし時枝分類も小川分類も概念的には成立するものの、実際に今回、林家のお札を調査してみると、どちらとも判断のつかないものが多い。

また、時枝自身が「これらの類型は（中略）かならずしも心意を反映したものではない。」と述べ（時枝 1988）、また小林が「数の多い少ないによって信仰心の度合いをはかってよいのか」と問題提起している（小林 1999）ように、分類・類型化と、お札に込められた心意を理解することとは別の問題である。そして小林がお札の理解のためには「当地の神仏や代参講などをはじめとする信仰関連に根ざした民俗誌的な調査研究が必要」で「社寺側に即した個別的研究（中略）とも連動」すると指摘する（小林 1999）ように、お札は、その家、あるいは地域の信仰を研究するための素材であって、分類自体がお札調査の目的ではないだろう。

戸川は、一信仰拠点である出羽三山の守札研究を深めることによって、信仰の複雑な様態をモノ資料に即して解説することが可能であることを示した（戸川 1987）。菅根論稿の巡礼札の分析（菅根 1991）、木原論稿の大山寺の版木調査への言及（木原 2007）などにも同様な深化がみられ、お札を素材として、いかに信仰の実態に切り込んでいくかが重要なのだと教えられる。

本稿では、家の歴史や地域の民俗誌に配慮し、お札に

込められた心意に少しでも近づくことができるような記述に努めた。お札の分類も行っているが、あくまでお札の全体像をつかむための作業であり、確然とした分類を目的としていない。むしろ、かつての信仰を掘り起こそうとした記述に、お札を素材にした研究の可能性を示すことができたら望外の喜びである。また一方で、聞き取り調査に限界があることも再確認せざるを得ず、一覧表を掲載することにより、今後の研究の基礎資料となることを願う。

ついては、今後、お札のデータベース化を課題とした。お札のデータを写真とともに誰もがアクセスできるように公開することで、研究の可能性が格段に広がるだろう。全国各地の旧家の屋根裏から降ろされたお札が、研究素材となる多くの情報を有した宝の山であることに、すでに多くの人気が気づいているはずである。

なお本稿では先行研究に倣い、御神札・祈禱札・護摩札・大麻・御影・御守・御符・撤饌など、寺社から頒布される木札・紙札などを総称して「お札」の語で括っている。1980年代に研究が始まった当初は「守札」の語が使用されることが多かった。しかし、「守札」は学術的な造語であって「お札」のほうがふさわしいとの考えから、近年では「お札」の語が使用されることが多くなっており⁽¹⁾、本稿でも従った。

2. 林重孝家について

千葉県佐倉市坂戸は佐倉市南部、弥富地区の一集落である。坂戸は縄文の昔から継続的に集落が営まれていた地域であり、8世紀中葉から9世紀中葉に営まれた広遺跡の住居跡から発見された「坂津寺」「寺」「仏」などと記された墨書土器、また馬場城館、尾牛城館の2つの中世城館跡などが特筆される（佐倉市史編さん委員会・佐倉市 2014）。また、南の尾牛地区が本村より古く、「坂戸は尾牛から始まった」との伝承がある（千葉県無形民俗文化財連絡協議会 2019、52頁）⁽²⁾。林重孝家は屋号を善兵衛といい、中世には千葉氏の家臣であり尾牛に住んだ

が、手狭になって現在地へ移ってきたと伝えられている。また佐倉宗吾（木内惣五郎）とともに直訴を計画した「七人名主」の軒であり、坂戸村善兵衛だけが追放の処分を受けなかったのは、自宅と寺（浄土宗西福寺）に火をかけて証拠を消したからだとの伝承がある⁽³⁾。

今回改築された母屋は、文彦が昭和25年に嫁、貞子を迎えるために建てた家である。文彦は昭和19年に満州へ出征してシベリアに抑留された後、昭和22年に復員した。戦前より自家所有の山から木材を伐って準備を進めていたものの延期となっていた普請に、復員後着手し、25年に一応の完成を見たが、貞子の嫁入り後も障子などの建具が少しずつ追加され、また随時増建も行われた。それ以前の住居は、年代は明らかではないが林家では再度火事を出し、その際に岩富町の松原喜兵衛家が、どこかの家をほぐした材料を持ってきて建ててくれたものだった。その家の屋根裏にあげられていたお札は、昭和25年にそのまま新しい家の屋根裏に移された。仏壇の上に神棚が設けられた、その真上にあたる位置であったという。「御札は火事除け」といわれ、その後も文彦によりたびたび追加されていたとのことである。重孝の代になってからはお札を屋根裏にあげたことはなく、小正月のどんど焼き⁽⁴⁾で燃やしているとのこと。そして、平成30年の改築に際して、藁のカマスが1袋、肥料の紙袋が1袋、そして縄で括られた1束の3括りが発見され、降ろされることになった。

お札のなかに小七や小七の母やをの名が見られ、また「神祇官八神殿」（別表No.65・66）の存在、京都愛宕神社（白雲寺）（別表No.50・51）の仏像絵札や妙義神社（石塔寺）のキリーク（阿弥陀如来の種字）の入ったお札（別表No.57）など神仏混淆の状況などから、明治初期あるいは江戸末期が上限と考えられ、火災もその頃であったかと推測される。下限は、文彦が亡くなった平成20年となる。

ちなみに火災後に家を建てて林家を助けた岩富町の松原喜兵衛家は、江戸時代に干鯛や米穀物の商いで資産を



写真1 カマスに入っていた状況。



写真2 カマス内にあったお札箱。

作った在郷商人であり（佐倉市史編さん委員会 1973）、かつて坂戸にも広い土地を有していた。松原家の資産を作った人物は、林善兵衛家から婿に入った人であったため、松原家と林家とは末代まで付き合うとの仁義により、正月2日には毎年、松原家から挨拶に来ていた。火事で何もかも失ってしまった林家を助けたのも、その関係からだった。戦後の混乱でいつの間にかつきあいが絶えてしまったが、坂戸で33年に一度開催される大十夜に松原家が「大角塔婆」を寄進している背景には、林家と松原家の繋がりがあるといえる。

さて、お札に名前の記されている方々を代々の当主とその妻を中心に整理すると、図1ようになる。林家は代々農業を営み、重孝の代になってからは有機農業、自家採種にこだわり、現在では全国的に広く知られる存在となっている。

そのなかで文治郎は異色な存在であり、農業を家人に任せて竹屋の商いに従事したという。醤油樽や酒樽のタガの材料となる孟宗竹を扱い、山ごと買うと人を頼んで伐採し、銚子や船橋、あるいは関西の造り酒屋などへ卸す仕事をしていた。関西方面の寺社のお札には文治郎が受けてきたものも多いのではないかとのことである。

また、豊一の弟の徳次は、第二次世界大戦で南方に出征し、新聞に掲載されるような活躍をした猛者であったが、爆弾の破裂音で難聴を負って帰還した。歴史好きで自分の足で歩いて集めた資料を遺した一方、晩年はネクタイをスーツケースに入れて売り歩く、車寅次郎（映画「男はつらいよ」シリーズの主演）のような放浪生活を送ったという。遠方のお札には徳次が受けたものも含まれていると考えられる。

妻の実家の場所もお札を分析する際に大切な要素となる。重孝の母と祖母は、ともに金親（千葉市若葉区金親町）の出であるが、金光院（別表No.49）は金親町の古刹である。また重孝の妻初枝は東京都清瀬市の出であるが、清瀬では7月の日枝神社獅子祭に結婚して家を出た娘が婿を伴って帰省し、婿が神社に花代（祝儀）を出して札を受ける習慣があり、夫妻もしばらく毎年参詣に行っていたという。また境内の水天宮は安産祈願で知られ、5日の縁日と戌の日が重なると特に参詣者が多い。初枝もここで腹帯と安産祈願の「いつもじ」の御符を受けたという。「日枝神社獅子祭」の紙札（別表No.517～524）と御符（別表No.92）は、ここに由来するものである。

3. 坂戸地区の寺社と講について

坂戸は現在およそ100軒の集落であり、およそ3分の2にあたる68戸が浄土宗西福寺の檀家である。残る3分の1は日蓮宗で、岩富の長福寺、内田の妙宣寺など近隣寺院の檀家に分かれているが、墓地はひとつの共同墓地が営まれ、法華堂が建つ。林家は西福寺の檀家であるが、法華堂の墓地にも7つの墓を持ち、江戸時代の墓石だという。昔は嫁や婿に来ると生まれた家の宗派のまま葬られたからで、そのように浄土宗でありながら法華堂にも墓のある家が坂戸には7、8軒あり、いずれも古い家だとのことである。

神社は八幡神社である。今は神事の時だけ宮本（佐倉市宮本）から神主が来ているが、昔は神社に住んでお札を出す人がいた。昔から、そして今も年に3回、正月守・五月守・九月守が幣束、祓串とともに配布される。正月は神宮大麻「天照皇大神宮」と「奉齋大年神守護攸」、5月は火伏の札「齋火産霊神 奥津彦神 奥津姫神守護」、9月は盗難除の札「豊磐窓大神 櫛磐窓大神 家門安全守護攸」である⁽⁵⁾。祓串は「晦日祓」として新しいお札をあげる前に家の各所を祓い、村に何か所かある決まった場所に立てるもので、昔、イナムシ（稲虫）送りの藁ヅトを立てた場所と同じだそうである。

坂戸の参詣講は、サンヤマ（出羽三山講）、秩父参り（秩父三十四観音と長野市の善光寺を参詣）が今も継続され、大山（大山阿夫利神社）も近年まで毎年参詣が行われていた。男はサンヤマに、女は秩父に一生に一度行くものとされ、どちらも死んだときに棺に入れる「死装束」を受けるのが目的である。結婚して子どもの手が離れた年代でまともに行くもので、まず夫がサンヤマに行き、次に奥さん達が秩父参りに行く習わしとなっている。重

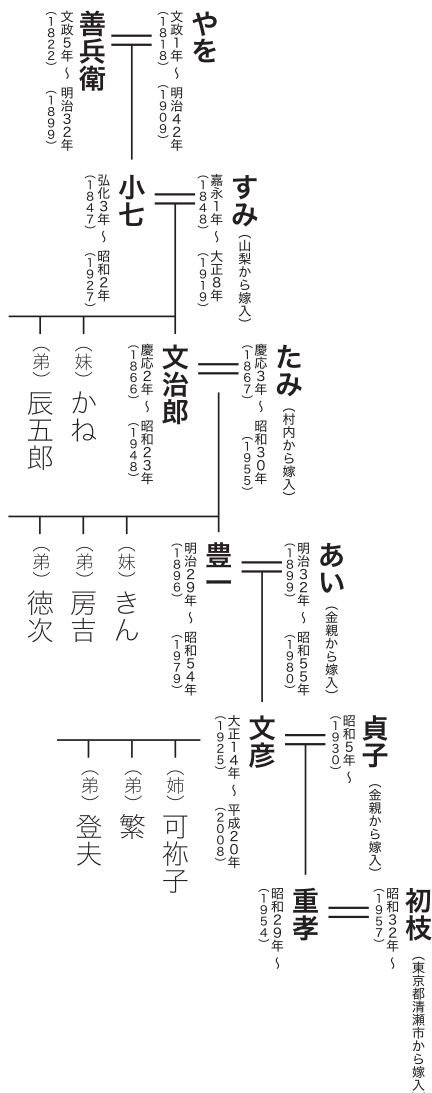


図1 守札に記された方々の関係図。

孝は平成10年にサンヤマへ、その数年後には初枝も秩父参りに行った。サンヤマに行った仲間では、その後伊勢や出雲、九州への旅行に出かけている。伊勢への旅行では四国の金刀比羅宮、姫路城などに足をのびし、出雲旅行では鳥取砂丘から若狭湾を、九州旅行では大宰府、宇佐八幡宮、宮崎神宮、高千穂峡、阿蘇山などを回ったという。いずれも3泊の旅行だった。女性の場合は、秩父参りをした仲間で見聞講が結ばれ、年2回、観音様の掛け軸を下げて歓談する集まりが持たれる。また旅行も計画され、笠森観音や清澄寺など房州の寺社を回ったり、伊香保あるいは日光などへの、日帰りか1泊の旅行が行われた。このような村の仲間で行く旅行では、お札を村うちや親戚の分まで求め、土産に添えたものだという。林家のお札には、参詣講やその後の旅行で自らが求めたお札のほか、土産として貰ったものも含まれているはずである。

大山講は、7月27日の山開きにあわせて毎年参詣が行われた。村の世話人が中心となりバスを仕立てて出かけたもので、男性も女性も参加した。朝早く大山参りを済ませると、その足で方向違いの遠方の観光地まででかけることも少なくなかったという。また、かつては富士山の講もあったのか、重孝は富士登山で使用した杖が家にあったのを見たことがあったとのことだが、詳細はわからない。

その他の代参講の存在について、重孝には心当たりがないとのこと。地域の方々からも聞くことができなかった。坂戸は昔から代参講にあまり積極的な土地ではなかったのだろう。それは、林家のお札の内容からも窺うことができるように思われる。

女性の講には、前述の観音講のほか子安講、三夜講、念仏講⁶⁾があった。いずれも寺社参詣は伴わない村うちの講であるが、子安講と三夜講で下げる掛け軸は、どちらも龍ヶ崎市龍泉寺の聖観音菩薩像である。昭和30年頃まで、観音像を入れた厨子が現在の佐倉・四街道・千葉・習志野・八千代市域に巡行する「背負い観音」の行事が行われていた(丸山 1996、千葉県立中央博物館大利根分館 2015)。子安講と三夜講の掛け軸や林家に遺された龍泉寺の木札(別表No.26~35)は、背負い観音とともに来訪した僧から受けたものだろう。

また、西福寺は千葉寺十善講の札所になっている。年1回札所回りの一行が訪れると村をあげて接待が行われ、また主だった家が宿泊先となった。林家でも宿泊を引き受けていた。札所回りの一行から受けたか、または巡礼側に参加する者もあったのか、千葉寺のお札が11点あり、うち弘法大師像の紙札が5点となっている。今も札所回りは続いているが、少人数が自動車で行っているために接待することもなくなったという。

成田山新勝寺と宗吾霊堂への参詣は、家ごとに行われる。重孝は子供の頃、よく祖父豊一に連れられて馬渡から成田行きのバスに乗り、新勝寺にお参りすると必ず宗吾霊堂に寄って帰ってきた。毎月ではないもののがかなり頻繁だったとのことである。父文彦にいたっては「月詣

り」の習慣で、毎月片道20kmを超える道のりを自転車で往復していたそうである。

4. 忘れられた信仰

林家のお札の分析は木原により後述されるが、地元坂戸の産土である八幡神社を除くと、その多くは現在でもよく知られ、全国から参詣者を集める大寺社から出ている。しかし中には、坂戸近隣にあって、かつては周辺地域から広く信仰を集めた歴史を持ちながらも、今は知る人ぞ知る埋もれた存在となっている寺社が含まれている。市町村史などに全く記載がないものもある。お札は地域の庶民の信仰の歴史を発掘することができる貴重な有形資料であることが、このことによっても理解される。以下、いくつかを紹介する。

①米本稲荷神社(別表No.1)

八千代市米本に所在する。『千葉県神社明細帳』には寛政11年(1799)に京都伏見稲荷より勧請されたとの由緒が記載されている。現在の社殿は明治27年(1894)に再建され、所狭しと飾られる彫刻の多様性が特筆される。このときの再建寄附連名碑が境内に立ち、千葉市・佐倉市・四街道市・船橋市・印西市など広範囲から寄附を仰いでいることがわかる。坂戸の地名を見つけることはできなかった。

②愛染山金光院(別表No.49)

千葉市若葉区金親町の真言宗豊山派の寺院である。正応2年(1289)開創。御成街道沿いにあり、御茶屋御殿も近い。元和元年(1615)に徳川家康が東金での鷹狩の折に立寄り使用した什器や衣類が伝えられている(平凡社地方資料センター 1996)。また千葉寺十善講の81番札所である。

札には「転読大般若経六百軸」とあり、大般若経転読の行事が行われていたことがわかるが、現ご住職はそのような行事が行われていたことも大般若経の存在もご存じないとのことである。

③布太中島大師(別表No.114・115・226・227)

栄町布太の中島家の大師堂である。お大師様を深く信仰していた中島家の祖先が昭和初期に四国八十八ヶ所の第十一番金剛山藤井禅寺を写したもので、布鎌八十八ヶ所霊場(布鎌大師)の番外札所となっている(小倉 2000、高塚 2000)。藤井禅寺の本尊は薬師如来である。

④法宣寺(別表No.127)

八街市根古谷に所在する。長禄元年(1457)に本土寺日意上人により開基された日蓮宗寺院である。日蓮上人の姿を写した木像「生御影」が安置され、この尊像と本土寺伝来の妙符が難病の治癒や安産にご利益があるとして信仰を集め、幕末から昭和初期にかけて大勢の参詣人で賑わった。教線拡張と伽藍修復助成を目的にしばしば江戸出開帳を行ったことも知られている(平凡社地方資料センター 1996)。

⑤飯野山東徳寺(別表No.163)

佐倉市飯野に所在する真言宗豊山派の寺院である。観音堂の馬頭観音が「飯野の観音様」の名で知られ、かつ

て馬の守護神として広く信仰を集め、また堂の正面、広縁に安置される「おびんづる様」も病治癒の功德があるとの信仰がある（佐倉市史編さん委員会編 1987）。境内には常夜灯や馬頭観音供養塔など、信者から奉納された石造物が多く、手水石には元禄11年（1698）の年号がある。

⑥明王山根本寺（別表No.108・164・242・320～322）

市川市国府台に所在する真言宗豊山派の寺院である。昭和47年に現在地へ移転するまでは、松戸街道を1.5kmほど南下した場所に國府神社と並存していた。戊辰戦争の戦火により荒廃し無住の時期が長かったが、明治末に根本地区の住民により堂塔が修復され、大正7年には中村弘龍を住職に迎えた。弘龍の父、中村力明（1856～1922）は河鍋暁斎に師事しながらも19才で出家し行人として生きた人物で、晩年、新四国八十八ヶ所霊場を千葉の地に開くことを発願し、四国松山寺より授かった安産地藏尊を根本寺に安置して、長男の弘龍を住職として入山させたという（中村 2018）。昭和初期には下総地域を中心に信者数が1000人を超え、佐倉は特に信者が多かったとのことである⁽⁷⁾が、安産地藏尊は秘仏とのことで拝観が許されず、また「四国松山寺」もその後廃寺になってしまったのか確認できず、お話の裏付けがとれないのは残念である。

⑦東高野山遍照寺（別表No.240）

四街道市四街道三区にある高野山真言宗の寺院である。四街道は明治27年の総武鉄道四街道駅の開設とその後の軍施設の設置により急速に発展した地域であり、畔田村（現佐倉市畔田）出身の高野山で修行した僧によって大正7年に創建された⁽⁸⁾。現住職で9世となる。敷地内に大師堂があり、千葉寺十善講の番外札所になっている。高野山真言宗の寺院は千葉県には数が少ないこともあり、檀家の3分の1が四街道市外の信者であるという⁽⁹⁾。

⑧佐倉山東福寺（別表No.241）

佐倉市宮前にある曹洞宗の寺院である。昭和3年に弥勒町に創建された。佐倉藩主であった堀田正盛公が作らせたとの伝承がある宗吾霊像と堀田家伝来の「蔵六石」が安置され、宗吾観音と呼ばれた。成田山参詣客に佐倉を素通りさせまいとの意図もあって町の人々が建てた寺院であったが、宗吾堂東勝寺との争いから昭和30年に現在地に遷座した⁽¹⁰⁾。近年は野田市古布内の浄福寺が管理している。

⑨吉岡大六天神社（別表No.243）

四街道市吉岡に所在。海難や災厄を祓う神として信仰され、特に浦安の一心講が毎年7月5日に大勢で参詣し、地元の当番の世話により神社裏手の湧き水を使って飲食をしたり、ご神木の葉を入れた風呂に入り、泊まって行く人もあったという⁽¹¹⁾。境内の「石阪敷石寄附名表」は明治31年の建立だが、千葉市北西部から佐倉市南部にわたる地域の人々の名が刻まれ、なかには浅草区永住町や栃木県栃木町の地名も見える。

⑩虎ノ門金刀比羅宮（別表No.2・3・37・58～61・74～87・185・362・363）

東京都港区虎ノ門のオフィス街に所在する。万治三年（1660）に丸亀藩主京極高和が、讃岐の金刀比羅宮の御分霊を江戸藩邸に勧請したのが創始とされる。江戸では文化・文政期以降、藩邸など武家屋敷地に勧請された神仏が市民に公開されるようになり、なかでも虎門（丸亀藩邸）金毘羅社、芝赤羽根（久留米藩邸）水天宮は多くの参詣人を集めた（森谷 1987、宮田 1987）。このような江戸に勧請された金毘羅社への参詣の流行が、金刀比羅信仰の全国的な隆盛の要因のひとつであると指摘されている（森谷 1987）。また丸亀藩金毘羅社の信仰基盤は藩邸出入商人にあったこと、信仰圏は下総・上総にも及んでいたことも明らかにされている（岩淵 2000）。林家においても講札や月詣の紙札など24点もの札が確認され、熱心な信仰があったことがわかる。「金毘羅大権現」とある月詣の札は、明治初年の神仏分離令以前のお札なのだろうか。また、林家の人物が実際に月詣に行き受けたものなのだろうか。総武本線が開通する明治27年（1894）以前であれば、片道50kmを超える道のりを徒歩で参詣したことになる。富里市新橋（富里市教育委員会 2011）や栄町安食（小林 1996）でも相当数のお札が確認されており、江戸近郊農村への金毘羅信仰の流入の経緯や信仰の実態について興味を惹かれるところである。今後の課題としたい⁽¹²⁾。

[1～4節 小林]

5. 屋根裏に上げたお札の役割

林家のお札は他の地域の事例と比べてどのような特徴がみられたのだろうか。まず、お札を上げた場所であるが、林家ではお札を「必ず神様（神棚）の上に置き」と明確に言い伝え、屋根裏の神棚の真上の位置に上げていた。従来こうした屋根裏に上げたお札の役割は「集められたお札は大量に溜まると屋根裏にあげて家の守りをする」また「家を火事から守る」「雷除けである」など言われていたようだ（西海 1987、菅根 1991、小川 1996）。しかし近年この言い伝えはあまり聞かれなくなった。林家では家を2度焼失している事から、殊に嚴重に伝えられていたようだ。そして先代文彦が昭和25年現母屋を新築した時に、それまで住んでいた古い家からカマスと肥料袋、縄で括られたお札類をそのまま新母屋の「神様の上」に上げている。昭和29年生まれの現当主重孝は、父親からお札のことは聞いていたが自らはお札を上げていないので、当家の2度目の焼失（江戸末～明治初期頃と考えられる）以後、昭和期頃迄に集められたものと考えられる。明治初期の神仏分離以前は神社と寺の両方からのお札が出されていることが多いが、この一群のお札類はその傾向があまり見られないことから、明治初期以降のものがその多くを占めていると考えられようか。

また家の新築に伴い、お札も古い家から新しい家に「家移り」ということは普通に行われていたようである。一例として、八千代市で明治期に開発した少し離れた場所に旧地の家で集められたお札を携えて家移りしたことが、当家に残されたお札から確認されている⁽¹³⁾。また、

香取市の旧家では事情がありムラウチの別の家とお互いの家を交換した時に、家移りに際して家人と共にお札も屋根裏から外され、交換先の家の屋根裏に上げられていたことが確認されている⁽¹⁴⁾。こうした事例から、お札はただ家を守るのではなく、「お札を集めた当家人々と共にあり、その住まう家と人を守る」という事であるようだ。

6. お札の形態とその内容

次に今回収納されていたお札とその内容についてであるが、お札は木札と紙札があり、紙札401点、箱札61点、木札124点、その他7点、総数は593点であった。

紙札は一枚物、大麻、掛紙のあるもの、その中に内符のあるもの、御守護や供物の関連のお札が付いているもの、薄い経木を芯に包んだもの、などその形態は様々である。また木箱の中に紙のお札が収められているものは本来紙札であるが、便宜上箱札とした。木札は一枚の木板に祈願の内容などを直接書いたもので、掛紙付きもある。その他は布製札・金属製刀剣・木製杓子などである。お札が発行された社寺別に集計したのが表1と表2であるが、その範囲は、北は山形県出羽三山神社、南は九州宮崎神宮と鶴戸神宮まで全国各地に及ぶ。しかし、やはり佐倉市周辺地域から県内、関東一円が多いことは言うまでもない。

こうした多くのお札はどのような機会に当家に集められたのか考えると、いくつかの特徴が見えてくる。先行研究の時枝(1988)、小川(1995・1996)の分析を参考に筆者がまとめたのが①地縁的社会的範囲(旦那寺と産土、生業の関わり)、②家と家族の安寧(健康長寿・病平癒祈願、安産祈願、武運長久など)、③講の信仰(参拝講・代参講)、④御師(おんし・おし)による配札活動による、という4分類(木原 2007)であるが、それぞれ明確に分類できるとは限らず、①と③、③と④が重複したり、判別がつきにくいものがあり、括る事の難しさは否めない。

①地縁的社会的範囲(旦那寺と産土、生業の関わり)

八幡神社の行事、講や代参などの地元の講や信仰に関しては小林記述に詳しいが重ねて述べるなら、地元坂戸

八幡神社47点は正・五・九に氏子の家々に出された決まりの神宮大麻、歳神札、火伏札、盗難除札に相当するもので、通年時期毎に配札されるものである。隣接する成田山新勝寺65点、東勝寺(宗吾霊堂)60点とこの3ヶ所で全体の3割近くに当たる。新勝寺と東勝寺は周辺地域では必ず両方を参拝する習慣があり、お札が多いのも共通した傾向である。東勝寺は別名宗吾霊堂と呼ぶように佐倉宗吾を祀ることから周辺地域では「百姓の神様」として信仰する農家は多い。新勝寺のお札は時代と共に厚みのある箱の中に紙札の護摩札や御守護、供物などをセットにして納めたものが多くなり、祈願の内容も家内安全、商売繁盛、五穀豊穡、厄除祈願、安産祈願など多様化しており、これは比較的新しい傾向と思われる。

②家と家族の安寧(健康長寿、病平癒、安産祈願、武運長久など)

家と家族の安寧と長寿・病平癒は通常参拝の多い成田山新勝寺や東勝寺に参るだけでなく、それぞれのご利益の篤い寺社が選ばれた。病平癒や疫病除けは茨城県稲敷市の大杉神社、香取市の山倉大神などがよく知られており、林家にも山倉大神10点、大杉神社1点が認められた。山倉大神はもと大六天神宮と称したが神仏分離により本地仏の大六天が観福寺に遷座され山倉大神と改められた。山倉大神・観福寺それぞれの縁起は多少の伝承の差はあるが、大六天の加護により疫病を退散させ、贅魚として鮭を献上し黒焼にした護符を服すると風邪や疫病に効くと記している。やがて火難除けや海上安全のご利益も加わっている。以前は山倉大神と観福寺の両方がお札を出していた。年1回厨子に入った「山倉様」が北総地域のムラからムラを回る「回り大六天」が盛んであり、拜んでお札を戴き次のムラに送ったという話は他の地域で聞いている⁽¹⁵⁾。大杉神社も内陸部では疫病や風邪除けの信仰があるが、坂戸では山倉講・大杉講は共に無かったようで、個人での参拝であったものか。同じく疫病除けにご利益ある愛知県の津島神社は伊勢参詣や金毘羅参りなどの途次に立ち寄っての拜受か、土産につけられたものか。安産祈願は千葉市稲毛浅間神社、成田市龍正院(滑河観音)、市川市根本寺、同手尼奈堂などにお参りするようだが、それぞれの地域や家により異なるようだ。特に千葉市稲毛浅間神社は有名で、林家で確認されている9点も安産祈願・浅間参りなどで拜受したものと推測される。

③講の信仰(参拝講、代参講)

かつて千葉県の多くの村々には伊勢講・大山講・三峰講・古峯原講・富士浅間講・秋葉講など様々な講が存在し、その祈願内容も豊作祈願、雨乞い、雷除け、火伏、盗難除け、疫病除けなどがあり、参拝や代参が盛んで定期的に参拝してお札を拜受していたが、坂戸ではどうだったのだろうか。重孝氏の聞き取りによると、現在坂戸での参拝講は出羽三山講(サンヤマ)、秩父講くらいだという。出羽三山講は男性の講の代表であり、秩父講は女性の講の代表とされている。参拝の方法も徒歩で出かけた時代から汽車や電車を利用し、近年はバスで出かけ



写真3 林家のいろいろなお札(整理前の様子)。「恩賜」の煙草入れにはお守りがぎっしりと入っていた。

表1 発行寺社別内訳 (1)

No.	都府県名	寺社名	点数
1	山形県	出羽三山神社	14
2	栃木県	日光東照宮	7
		輪王寺	2
		二荒山神社	1
		加蘇山神社	1
		榛名神社	5
3	群馬県	妙義神社(石塔寺)	1
		龍泉寺	10
4	茨城県	筑波山神社	2
		大杉神社	1
		清瀧寺	1
		鹿島神宮	1
		24ヶ所(表2に別記)	245
6	埼玉県	慈眼寺	4
		三峯神社	2
		橋立寺	1
7	東京都	虎ノ門金刀比羅宮	24
		清瀬日枝神社	8
		神祇官八神殿	2
		靖国神社	2
		三ツ又地藏堂	2
		清瀬水天宮	1
		武蔵御嶽神社	1
		明治神宮	1
		大鳥神社(須賀神社内)	1
		増上寺	1
8	神奈川県	大山阿夫利神社	39
		平間寺(川崎大師)	11
		鶴岡八幡宮	9
		銭洗弁財天宇賀福神社	2
		報恩寺	2
		寒川神社	2
		志田山朝日寺	1
9	山梨県	北口本宮富士浅間神社	6
		久遠寺	2
		富士山小御嶽神社	1
		富士一山教会	1
10	静岡県	富士山本宮浅間神社奥宮	5
		石室神社	1
11	長野県	善光寺	14
		戸隠神社	5
12	愛知県	津島神社	2
		熱田神宮	2
13	三重県	伊勢神宮	61
		金剛證寺	1
14	滋賀県	石山寺	1
15	京都府	愛宕神社(白雲寺)	2
		伏見稲荷大社	2

No.	都府県名	寺社名	点数
16	奈良県	春日大社	3
		東大寺	2
		橿原神宮	2
		大峯神社	1
		談山神社	1
17	和歌山県	遍照光院	12
		西門院	3
		金剛峯寺	2
		大圓院	2
18	香川県	正智院・大楽院	1
		金刀比羅宮	19
		善通寺	1
19	島根県	屋島寺	1
		出雲大社	5
20	宮崎県	鶴戸神宮	1
		宮崎神宮	1
21	不明		23
合計		88ヶ所	593

表2 発行寺社別内訳 (2) 千葉県分

No.	市町名	寺社名	点数
1	佐倉市	坂戸八幡神社	47
		甚大寺	1
		東徳寺	1
2	成田市	東福寺	1
		新勝寺	65
		東勝寺(宗吾霊堂)	60
		助崎神社	2
3	四街道市	龍正院	1
		遍照寺	1
4	八街市	吉岡大六天神社	1
		法宣寺	1
5	千葉市	千葉寺	11
		稲毛浅間神社	9
		千葉神社	2
		金光院	1
6	香取市	山倉大神	10
		香取神宮	4
7	匝瑳市	松山神社	1
8	芝山町	観音教寺	10
9	市川市	根本寺	6
10	鴨川市	清澄寺	4
11	栄町	布太中島大師	4
12	八千代市	米本稲荷神社	1
13	長南町	笠森寺	1
計		24ヶ所	245

ることが主となっている。一般に代参は地元世話する人がいることで盛んになることが多く賑わったが、第二次大戦後は徐々に減りはじめたという。

④御師（おんし・おし）の配札活動による

御師は古く平安時代の寺院からはじまり、中世には熊野・伊勢・富士などの神社でも成立したという（西海1999）。近世では寺社に所属する宗教人が定期的に各地を回り、お札や暦、産物などをもって配札と参詣の勧誘していた。伊勢神宮や相模大山阿夫利神社、富士浅間神社、出羽三山神社などにその存在があり、県内では出羽三山や相模大山阿夫利神社の御師の活動がよく知られている。中でも出羽三山の坊（宿坊）からの檀那場回りは、御師が講員の集まり場である行屋や世話人宅（ヤド）に来て三山の拝みをしてお札を配り、夏の登拝の勧誘をする。迎えた地域では三山講（八日講）の講員が接待する。そして三山登拝をする時には坊に宿泊して、その案内で登拝をした。現在でも上総地方を中心に継続されているが、多くの地域では消えている。林家の大山阿夫利神社39点や出羽三山の札14点は、御師の配札ではなく、実際に参拝に行き受けた札であるようだ。また伊勢神宮札が61点と多いがこれは坂戸八幡神社の神主から受けているとのことである。かつては坂戸でも御師による配札活動がそれなりにあったと考えられるが、聞き取りでは既に失われて久しいようであった。

7. 特異なお札と信仰

600点に近いお札の中には、お札ではないがお札に近いもの、時代の特徴などがみられるものがある。

①善光寺の月牌証文

別表No.400～410は長野市の善光寺のものである。このうち1点は「善光寺如来御寶前祈祷之牌牘」と記す木札であるが、あとの紙片は昭和18年林あい宛、昭和41年林貞子宛、昭和44年林文彦宛、平成3年林文彦宛の月牌証の領収書に当たるもので、重孝の祖父母と父母の代にそれぞれ受けていることがわかる。月牌証は先祖を毎月定期的に供養してもらうことで、その祈願料の領収書といえる。また家内安全なども含まれているようだ。こうした月牌証文は高野山の各寺院が経済活動の一助として全国から集まる宗派を超えた信徒から先祖供養として行っていることがよく知られている。高野山では月牌証文・日牌証文・茶牌証文などがあり、家族が亡くなると遺族が高野山に供養を願い、その証文を盆棚に下げるといふ事は県内でも聞かれた。その内容は供養する仏の戒名と供養依頼者の名前と申し込んだ年月日、志納金額などが記されているのが通例のようだが、善光寺でも少し形が異なるが同様のものであろう。もとは六字名号や依頼者の名前入りの掛け紙などに包まれていたようだ。当家のお札の一群には高野山のお札が別表No.130・416～434の20点あり、奥院・遍照光院・大圓院・西門院などの寺院であるが、林家では高野山での月牌供養の習慣はなかったようである。善光寺は秩父参りで女性が参拝する所なので馴染みがあり、供養がしやすかったのだろう



写真4 疍の虫封じの木札。

か。

②釘を打付けた疍の虫封じのお札

別表No.134の出どころは不明であるが木箱の蓋の内側に梵字50字と虫篇の漢字13字と「九歳女カ子蟲平癒祈所 観自在尊妙智力光明真言功能力」と墨書きした虫封じの木札がある。このうち虫篇の漢字と蟲の字に釘を打ち付けてある。外箱に「坂戸邨林善兵衛娘カ子」カ子（ネ）は3代前の文治郎の妹であるので明治期のものと思われる。同様にやはり出どころ不明だが木板に虫封じの紙札を釘で打付けてあるお札が富里市でも確認されている。疍の虫封じのお札は割合よくみられるが、小振りの紙札で家内の部屋の長押などに木製の札入れに入れ貼り付けてあるものを現在でも見かけることがある。その配出元はいろいろで外川神社、千葉寺、新勝寺のものがある。林家にはなかったが印西市船尾の外川神社が疍の虫封じで知られ、1月と8月の縁日には遠方からも参拝に来ていたという。

③戦争中の弾除け観音のお札

お札は様々な祈願がなされる。戦争中には「武運長久」祈願のお札もあり、武人の神徳の篤い鹿島神宮や香取神宮などの参拝やお札拝受が盛んであったと思われる。そうした中で珍しいお札がある。別表No.531は「石鉄山劔山弾除御守」裏面に「香川県西講組」とあるが香川県のいずれの所在か不明である。No.323・586は神奈川県綾瀬市の報恩寺の紙札で「林徳次 武運長久弾除観音日夜守護」とあり、どちらも戦争中敵の弾に当たらないお守りである。林徳次は重孝の大叔父にあたり、第二次大戦で出征しているので、この時のものであると判明。香川県内と思われる弾除御守の詳細は分からないが、同じ第二次大戦時のものであろうと推測される。軍国主義の戦時下という非常時であるが、武運長久と共にせめて弾に当たらないようにという思いは本人及び家族の切なる願いであったろう。そうした庶民の願いをあらわしたこの

3点は貴重なものである。

8. まとめ

林家の600点に及ぶお札は全国88ヶ所の寺社から集まったもので、山形県から宮崎県に至る広範囲な分布であった。これらのお札の収集された時期は幕末～昭和・平成に至るものであると位置付けられ、収集された時代が飛びぬけて古い訳ではなく、寺社の分布範囲もまたそのお札類に特殊な環境や特記することは勿論あるが、特別に希少価値のものばかりが含まれているわけではない。そこから映し出されてきたのはごく普通の人々の暮らしと信仰であった。しかし、実はそれが大事なことであると思う。

今回のお札の動向を考えると、地域の産土、家内安全や安産祈願など現在も変わらないか、むしろ祈願成就の多様化が進む寺社がある一方、参拝講や代参講、御師の配札は昭和前半期までの盛んであった時代に比べ、交通手段や参拝の捉え方、人々の神仏や講に対する意識の変化が見られる。

また近年は翌年の新しいお札を受けると、役目を終えた古いお札は寺社などでお焚き上げされることが多くなり、手元に残されることが無くなっている。そうした現状の中で、役目を終えたお札類を多く集める事で更なる神力・霊力のパワーアップを図り、家とそこに住まう人々の強力な守護神とした先人たちの想いを、後世にきちんと伝えてゆきたいと考える。

[5～8節 木原]

調査の経緯と謝辞

佐倉市坂戸では平成28年(2016)11月3日に「大十夜」という行事が行われ、小林は県指定文化財「坂戸の念仏」に関わる記録映像や報告書をまとめる事業の担当であったため、念仏踊りの練習からいくたびか坂戸西福寺を訪ね、行事終了後もしばらく訪問が続いた。そのご縁から、平成30年(2018)6月に林重孝氏より母屋を改築する際に天井裏から出てきたというお札について相談を受けた。

小林はこれまでお札類の調査経験がなく助言を必要としたため、木原律子氏にお願いし、一緒に見せていただいたのが平成30年8月20日のこと。その後一年の間をあけてしまったが、令和元年(2019)7月1日から10月7日までに林家を9回訪問し、玄関先でリスト作成の作業を進めさせていただくとともに、聞き取り調査にもご協力いただいた。度重なる訪問をお許しいただいたご一家に、心から御礼を申し上げます。

注

- 1：木原によれば、先行研究者でもある西海賢二からの助言もあり、多種多様なお札類を包括的に「お札」と表記するようになったとのことである。
- 2：小林が、地元民俗の聞き取り調査や編集を担当した。本稿の坂戸地区の歴史や民俗に関する記述は、特記

のない限り、本書作成の際に小林が調査したか、あるいは今回のお札の整理作業に伴って林重孝・初枝夫妻からお聞きした内容である。

- 3：小林は「佐倉惣五郎物」と呼ばれる実録本について全く不案内だが、白鳥(1931)所収の『佐倉義民伝』『佐倉宗吾郎伝』に「坂戸村善兵衛」を認めることができる。一方、『地蔵堂通夜物語』(白鳥 1931、大野 1978)では「六人の名主」に善兵衛は入らない。
- 4：林重孝氏によれば、かつては子供中心の行事だったが昭和40年ころに中絶し、昭和50年代後半に大人たちにより復活したとのこと。
- 5：宮司の羽根井孝彦氏にご教示いただいた。
- 6：子安講・三夜講・念仏講のうち、子安講だけは現在も行われているが、担い手は年輩の女性である。千葉県無形民俗文化財連絡協議会(2019)33・41頁を参照いただきたい。
- 7：根本寺の現住職である中村龍民氏にご教示いただいた。
- 8：矢部菊枝氏にご教示いただいた。
- 9：遍照寺のご住職利光弘文氏にご教示いただいた。
- 10：浄福寺ご住職山本崇文氏にご教示いただいた。
- 11：現地調査に当たり、矢部菊枝(2013)を参考にした。矢部氏は神社の近くにあったという「子ハ清水」の病氣直しの伝承と関連づけて考察しているが、現地では第六天に病氣療養に関わる信仰や伝承があったことは確認できず、子ハ清水と関連づけるのは難しく感じられた。
- 12：米谷博が栄町北辺田の金毘羅信仰について、利根水運とのかかわりから分析している(米谷 2019a、2019b)。しかし少なくとも佐倉市坂戸や富里市新橋の事例は、水運では説明できないと思われる。
- 13：八千代市高津新田稲垣家では母屋解体時に発見されたお札類から旧居住時代の近世からのお札が含まれており、お札を携えて家移りしたことが確認されている。
- 14：木原が玉井ゆかり氏と2008年に共同調査した香取市下小野玉井家の事例である。
- 15：昭和末～平成初年の印旛郡内での民俗調査で木原聞き取り。「小池の信仰」『よなもと今昔』10(阿蘇郷土研究サークル 1992)に収録。

引用文献

- 岩淵令治 2003「武家屋敷の神仏公開と都市社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』103、133-199頁
- 大野政治 1978『地蔵堂通夜物語－佐倉惣五郎一代記－』崙書房
- 小川浩 1995「千葉県北西部の守札にみる信仰形態Ⅰ－近世から明治期までの分析－」『野田市史研究』6、161-196頁
- 小川浩 1996「千葉県北西部の守札にみる信仰形態Ⅱ－近世から明治期までの分析－」『野田市史研究』7、161-180頁
- 小倉博 2000「布鎌大師について」『栄町の歴史』3、5-24頁
- 鎌ヶ谷市郷土資料館 1993「お札に対する現世利益の願い－初富菊名家旧蔵のお札について－」『鎌ヶ谷の民間信仰(鎌ヶ谷市郷土資料館調査報告書3)』25-30頁
- 鎌ヶ谷市郷土資料館 2018『平成29年度企画展 鎌ヶ谷・おふだづくし－信仰の玉手箱－』
- 川上勉彦 1994「守札からみた伯耆の庶民信仰」『民具マンスリー』27-7、12-22頁

- 木原律子 2004「調査報告 村上・宮崎家の守札」『八千代市立郷土博物館年報』6、12-13頁
- 木原律子 2007「房総にみる守札の一例－千葉県鴨川市の守札にみる信仰－」『民具マンスリー』40-8、15-24頁
- 小林稔 1996「屋根裏からの報告－山田家旧母屋取り壊しに伴う守札調査概報－」『栄町の歴史』2、35-49頁
- 米谷博 2019a「金毘羅丸亀街道の灯籠と丁石」『房総石仏研究会会報』142、1-2頁
- 米谷博 2019b「栄町北辺田の金毘羅宮」『房総石仏研究会会報』143、1頁
- 佐倉市史編さん委員会編 1973『佐倉市史 巻二』
- 佐倉市史編さん委員会編 1987『佐倉市史 民俗編』
- 佐倉市史編さん委員会編・佐倉市 2014『佐倉市史 考古編（本編・資料編）』
- 白鳥健編 1931『義民叢書 佐倉宗吾』日本書院
- 白井市教育委員会 2015『滝田家所蔵文書史料目録2（白井市文化財基礎調査報告書10）』
- 菅根幸裕 1991「守札の分析にみる村落の信仰－兵庫県福崎町の事例を中心に－」『民具マンスリー』24-5、5-14頁
- 高塚馨 2000「布鎌大師並びに四郡大師の調査報告－石造物を中心として－」『栄町の歴史』3 25-90頁
- 千葉県無形民俗文化財連絡協議会 2019『千葉県指定無形民俗文化財 坂戸の念仏－平成28年六十夜の記録－』
- 千葉県立中央博物館大根分館 2015『平成27年度企画展「母の祈り－利根川下流域の女人信仰－」解説書』
- 戸川安章 1987「守札と出羽三山」『民具マンスリー』20-7、1-14頁
- 時枝務 1988「守札と信仰－農家における守札の存在形態－」『民具マンスリー』20-12、9-16頁
- 富里市教育委員会 2011『富里の民俗－新橋・中沢地区－（富里市民俗文化財調査報告書3）』
- 中村龍民 2018「河鍋暁斎師と曾祖父・中村力明」『河鍋暁斎研究誌 暁斎』125、20-24頁
- 西海賢二 1987「守札にみる庶民信仰」『民具マンスリー』20-7、15-21頁
- 西海賢二 1999「御師」『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 257頁
- 平凡社地方資料センター 1996『千葉県の地名（日本歴史地名体系12）』平凡社
- 丸谷仁美 1996「利根川下流域の女人講－観音巡行・巡拝習俗を中

- 心に－」『日本民俗学』206、99-122頁
- 宮田登 1987「金毘羅と富士信仰」『金毘羅信仰（民俗宗教史叢書19）』雄山閣出版 81-92頁
- 守屋毅 1987「金毘羅信仰と金毘羅参詣をめぐる覚書－民間信仰と庶民の旅を考えるために－」『金毘羅信仰（民俗宗教史叢書19）』雄山閣出版 181-216頁
- 矢部菊枝 2013「四街道市吉岡の第六天神社と浦安の一心講」『四街道の歴史』8、67-77頁

**Faith Reflected in a Collection of Amulets
Preserved in Attic – a Case Study of Mr.
Shigenori Hayashi and His Family, Living at
Sakado, Sakura City**

Hiromi Kobayashi and Ritsuko Kihara

National History Museum and Institute, Chiba
955-2, Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan
Email: h.kbysh20@pref.chiba.lg.jp

A collection comprising of various kinds of about 600 old amulets, preserved in an attic of the house of Mr. Shigenori Hayashi and his family at Sakado, Sakura City, Chiba Prefecture, was studied. The collection brings us important information on life and faith of common people in the area in the past.